HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	書評論文：タデウシュ・エプシュタイン 『リンゲルブルム・アーカイヴ調査目録』ワルシャワ、2011 年
Author(s)	宮崎, 悠
Citation	スラヴ研究, 62, 59-71
Issue Date	2015-07-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/83635
Type	bulletin (article)
File Information	62-03_59-71.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

［書評論文］

タデウシュ・エプシュタイン『リンゲルブルム・アーカイヴ調査目録』ワルシャワ、2011 年 (1)

宮　崎　　悠

はじめに

本書は、第二次大戦期のポーランドにおけるホロコーストの実態をリアルタイムで記録した文書編纂プロジェクト「リンゲルブルム・アーカイヴ」（別名オイネグ・シャベス・アーカイヴ、ワルシャワ・ゲットー地下史料とも呼ばれる。以下 RA と略す）の調査目録である。RA の全容が明らかになったのは 2000 年代に入ってからであり、史料の総量は約 6000 点、3 万頁をこえる (2)。RA に独特な史料として、1939 年 9 月から 1943 年 2 月迄の個人の報告や証言、ワルシャワ・ゲットー宛の手紙、歴史家グループ「オイネグ・シャベス（以下 O. S. と略す）」(3) メンバーの論文、ゲットーの地下出版、文学作品、寄託された私文書が挙げられる (4)。本書は、現段階で判明しているこれら史料の全体を網羅する目録である。

史料の詳しい内容は後述することとし、予め本書の構成を示しておく。本書は大まかに 4 つの部分に分かれており、著者による解説（17–79 頁）、RA の目録（第 I 部：83–598 頁、第 II 部：601–808 頁）、互換表（811–850 頁）、索引（853–938 頁）で構成されている。目録には史料番号、作成時期と場所、執筆者（匿名、無名である場合も多い）、言語、筆記具（史料が印刷物であれば掲載紙名）が記載されている。また、既に研究書や史料集に引用されている場合には掲載頁が付記されている。互換表は新番号と旧番号の相方向の対照表であり（新旧番号について後述）、索引は人名と地名とに分かれる。

アーカイヴがその名を冠する歴史家エマニュエル・リンゲルブルム（Emanuel

---

1 Tadeusz Epsztein, *Inwentarz Archiwum Ringelbluma* (Warszawa, 2011).

2 Feliks Tych, Eleonora Bergman, Jürgen Hensel, *Guide to the Jewish Historical Institute* (Warszawa, 2003), pp. 13–15.

3 オイネグ・シャベス（オネグ・シャバット）は土曜の喜びの意、毎週安息日に会合をもったことに由来する。

4 その他 RA には、ワルシャワ・ゲットーやウッジ・ゲットーに関する公文書、ユダヤ人評議会に関する文書、ユダヤ社会自助 ŻSS に関する文書、広報、その他の印刷物が含まれる。Marta Markowska, “Od Redaktora,” in Markowska, ed., *Archiwum Ringelbluma: Dzień po dniu Zagłady* (Warszawa, 2008), p. 205; Tadeusz Epsztein, “Structure and Organization of the Ringelblum Archive and Its Catalog,”〔以下 Epsztein, “Structure” と略す〕in Robert Moses Shapiro and Tadeusz Epsztein, eds., *The Warsaw Ghetto Oyneg Shabes-Ringelblum Archive: Catalog and Guide* (Bloomington, 2009), p. 1.

Ringelblum, 1900–1944）は O. S. の中心人物であり [5]、彼の生涯と RA とを切り離すことはできない。そこで本稿は、まず彼の伝記を軸に RA 成立の経緯と歴史的背景を概観する。その上で戦後の RA の発掘・研究状況を整理し、史料の内容に触れる。最後に、本書エプシュタインの調査目録の特色と、旧目録との差異を確認し、今後の課題を検討する。

1. RA 成立の経緯と歴史的背景

19 世紀末以降のポーランドにおいて、マイノリティ集団の中でも重要な問題と認識されていたのが「ユダヤ人の問題」であった。第一次大戦から戦間期にかけ、国民国家化しようとするポーランド社会において、ユダヤ人を「ポーランド人」のカテゴリから排除する議論が優勢になった時、排除される側の人々は無言ではいなかった。

戦間期のポーランド・ユダヤ共同体において、民衆は政治主体としての活動力・発信力を向上させつつあった。ローカルな歴史研究の組織化 [6] を行ったリンゲルブルムは、こうした変化の要因を考える上で鍵を握る人物といえる。在野の歴史家であった彼は、ポーランド社会とユダヤ共同体の関係を、歴史研究を通じて改善できると考えた。若手歴史家を集めた研究会を多く主催し、ユダヤ研究協会（YIVO）[7] と協力してイディッシュ普及活動を行ったほか、一般の労働者の教育や貧困層支援に携わった [8]。

リンゲルブルムは 1900 年 11 月 21 日、ブチャチ Buczacz（1772–1918 年までハプスブルク支配下、現在はウクライナ領）のユダヤ系家庭に生まれた。第一次大戦が勃発すると、ブ

---

5 概説的な伝記として、Israel Gutman, “Emanuel Ringelblum, the Chronicler of the Warsaw Ghetto,” in *Polin*, vol. 3 (Oxford, 1988), pp. 5–16; Mark Beyer, *Emanuel Ringelblum: Historian of the Warsaw Ghetto* (New York, 2001). また以下も参照。Israel Gutman, “Emanuel Ringelblum: A Historian and His Time,” in Gutman, ed., *Emanuel Ringelblum: The Man and the Historian* (Jerusalem, 2010), pp. 79–116; Hanna Węgrzynek, “Ringelblum Emanuel (1900–1944) historyk, działacz społeczny, polityk,” in Marzena Wieczorek and Witold Sienkiewicz, eds., *Żydzi Polscy: historie niezwykłe* (Warszawa, 2010), pp. 257–260. 本人の著書として第二次大戦中の日記が知られている。Emmanuel Ringelblum, *Notes from the Warsaw Ghetto: The Journal of Emmanuel Ringelblum*, Jacob Sloan, ed. and trans. (New York, 2006). リンゲルブルム（ジェイコブ・スローン編、大島訳）『ワルシャワ・ゲットー：捕囚 1940–42 のノート［新版］』みすず書房、2006 年。

6 1891 年、ユダヤ史家シモン・ドゥブノフ（Simon Dubnow, 1860–1941）は東欧のユダヤ人に向けて歴史文書の収集と研究を呼び掛けた。これ以降、イディッシュの単語 Zaml の語義は本来の「集める」だけではなく、共同体の文書や口伝を収集・保存してユダヤ人が自らの歴史を叙述することを意味するようになった。リンゲルブルムの活動もこの流れを受けている。Samuel D. Kassow, “Introduction,” in Shapiro and Epsztein, eds., *The Warsaw Ghetto Oyneg Shabes-Ringelblum Archive: Catalog and Guide*, p. xv; Laura Jockusch, *Collect and Record! Jewish Holocaust Documentation in Early Postwar Europe* (Oxford, 2012), pp. 32–33.

7 YIVO は 1925 年、東欧・ロシアのユダヤ人の歴史を言語・宗教・フォークロア等の視点から多角的に研究することを目的に、当時ポーランド領だったヴィルノ（現リトアニアの首都ヴィルニュス）に設立された。1940 年にはニューヨークへ移転しており、リンゲルブルムらは RA が戦後 YIVO に寄託されることを望んでいたとされる。Kassow, “Introduction,” p. xvi.

8 リンゲルブルムの労働者教育について David Engel, “Writing History as a National Mission: The Jews of Poland and Their Historiographic Traditions,” in Gutman, *Emanuel Ringelblum*, p. 124.

チャチへのロシア軍の侵攻を前に、リンゲルブルムは家族と共にコロムィヤ Kolomyja に逃れ、その後ノヴィソンチ Nowy Sącz に避難した。生活費を得るため、高校在学中から放課後に同化ユダヤ人家庭の子弟にイディッシュを教えた。1919 年頃にはシオニスト政党のポアレイ・ツィオンに参加する [9]。ワルシャワ大学の医学部に進学を希望するも「人数制限」により断念し、歴史学部へ進んだ。1922 年秋からヤン・コハノフスキ（Jan Kochanowski, 1869–1949）やマルツェリ・ハンデルスマン（Marceli Handelsman, 1882–1945）のもとで学んでいる [10]。ユダヤ史についてはイツハク・シパー（Isaac Schiper, 1884–1943）の薫陶を受けた。後にマイダネクで没することになるシパーは、リンゲルブルムの目からすれば、1910 年代のユダヤ史研究に新時代の幕開けをもたらした歴史家であった [11]。シパーは従来の知識人に重点を置く伝統的なユダヤ史研究から、大衆の経済・社会活動の側面を重視する世俗的な歴史研究への移行を奨励し、リンゲルブルムのアプローチに影響を与えた [12]。

1923 年、リンゲルブルムらユダヤ系の歴史家達は歴史協会を設立する。このグループは YIVO と連携し、リンゲルブルムは協会の出版物の編集に参加した。1939 年までに 126 本の論説を寄稿するなど、積極的に運営に携わった。1920 年代後半にはラファウ・マーラー（Rafael Mahler, 1899–1977）[13] と共に論文集を編集・出版している。

1927 年に博士号（歴史学）をワルシャワ大学から取得したリンゲルブルムは、ヴィルノに教職を得た。1928 年にはワルシャワに戻り、1938 年までユダヤ人子女をポーランド語で教える中等学校の教壇に立つ。教育以外にも活動の幅を広げ、1929 年には非営利の貸付基金である相互扶助基金センターに参加し、ジョイントのポーランド支部の指導者イツハク・ギテルマン（Yizhak Gitterman, 1889–1943）と共に関連団体の機関紙の編集に

---

9 ポアレイ・ツィオンは社会主義シオニズムの代表的組織であり 1906 年にベール・ボロホフ（Ber Borokhov, 1881–1917）により統合された。後に分裂し、リンゲルブルムは終生左派（LPZ）の熱心なメンバーであった。LPZ は急進的な親コミュニストの立場をとり、マルクス主義を厳守した。またヘブライ語よりもイディッシュ志向であった。Yehuda Bauer, “Foreword,” in Emmanuel Ringelblum, *Polish-Jewish Relations during the Second World War* (Evanston, 1992), p. xli; Samuel D. Kassow, *Who Will Write Our History? Emanuel Ringelblum, the Warsaw Ghetto, and the Oyneg Shabes Archive* (Bloomington, 2007), pp. 21, 24. ボロホフについて、鶴見太郎『ロシア・シオニズムの想像力：ユダヤ人・帝国・パレスチナ』東京大学出版会、2012 年、8–9 頁、407 頁註 27。

10 コハノフスキとハンデルスマンのポーランド歴史学における位置について、ニーデルハウゼル・エミル（渡邊昭子他訳）『総覧ロシア東欧史学史』北海道大学出版会、2013 年、37–39 頁、42 頁。

11 Engel, “Writing History as a National Mission,” p. 121.

12 Kassow, “Introduction,” p. xvi. ガリツィアにおけるポアレイ・ツィオンの指導者でもあったシパーがリンゲルブルムに与えた影響について Kassow, *Who Will Write Our History?* pp. 21–22.

13 マーラーはノヴィソンチ出身の歴史家。15 歳までイェシヴァの伝統的な教育を受けた後、クラクフの中等学校を経て、ウィーン大学で歴史と哲学を学んだ。1922 年に博士号を取得してポーランドへ戻り LPZ に参加しながらユダヤ史の研究教育にあたった。YIVO の歴史部門等でリンゲルブルムと協働する。1937 年に渡米、1950 年にイスラエルへ移住し、1959 年以降はテルアビブ大学において経済史を教えた。Robert Moses Shapiro, “Mahler Raphael,” *The YIVO Encyclopedia of Jews in Eastern Europe* [http://www.yivoencyclopedia.org/article.aspx/Mahler_Raphael](最終閲覧日 2014 年 10 月 30 日).

当たった[14]。1930 年にはユディタ・ヘルマン（Judyta Herman, ?–1944）と結婚、息子ウーリ（Uri, 1930–1944）が誕生した。1932 年には博士論文を土台とする主著『1527 年までのワルシャワ・ユダヤ人の歴史』[15] の出版にこぎつけた。

博士論文の後、リンゲルブルムは現代までのワルシャワ・ユダヤ史を執筆する息の長い計画を立てていた。そのため、18 世紀後半にポーランドにおいて出版されたヘブライ語出版物の研究や、18–19 世紀にポーランドのユダヤ人が置かれた社会的・経済的環境についての一連の論考を執筆している。1937 年には『コシチューシコ蜂起におけるポーランド・ユダヤ人』[16] を出版し、軍人・塹壕堀・密使・兵站担当として、ユダヤ人が 1794 年の首都防衛に果たした役割を叙述した。ポーランド・ユダヤ人の社会史において、貧しいユダヤ大衆がコシチューシコ蜂起に参加した事実を証明し、ユダヤ人とポーランドの一般の人々との間の和解の重要事例にしようとしたのである[17]。

そうしたリンゲルブルムの意図に反して、ポーランド＝ユダヤ関係の危機を印象付ける事件が起こる。1938 年 10 月 28 日、ゲシュタポにより約 1 万 7000 人のポーランド国籍のユダヤ人が独ポ国境地帯に追放された。ドイツによるオーストリア併合後、ユダヤ系ポーランド人がオーストリアから帰国することを嫌ったポーランド政府が、在外ユダヤ人のパスポート更新を認めない国籍剥奪法を定めたことへの対抗措置であった。ドイツにおいて逮捕され、特別列車に押し込まれ、ポーランド国境へ送られた人々のうち約 5000 人がポーランドへの受け入れを拒まれた。足止めされた難民は国境の町ズボンシン Zbąszyń 近くの閉鎖キャンプに収容された。文字通り家から追い立てられた人々は荷造りどころか着替えもままならず、夜着のまま国境に到着した人さえいた[18]。惨状を知ったリンゲルブルムは、ジョイントの

---

14 ジョイント（The American Jewish Joint Distribution Committee）は第一次大戦期に設立された、ニューヨークに本部を置くユダヤ人支援団体。宗派の相違や政治的信条の相違を超えた「合同」組織として誕生した。ポーランドにおいてはユダヤ人の生産化や、反ユダヤ主義キャンペーンによって打撃を受けているユダヤ人商人・職人の支援を目的とした。Gutman, “Emanuel Ringelblum, the Chronicler of the Warsaw Ghetto,” p. 7; Kassow, *Who Will Write Our History?* pp. 95–97；高尾千津子『ソ連農業集団化の原点：ソヴィエト体制とアメリカユダヤ人』彩流社、2006 年、21、23 頁。

15 Emanuel Ringelblum, *Żydzi w Warszawie, część pierwsza: Od czasów najdawniejszych do ostatnego wygnania w r. 1527* (Warszawa, 1932).

16 1937 年にイディッシュ版が出され、翌年ポーランド語版が出された。ここではポーランド語版を参照した。Emanuel Ringelblum, *Żydzi w powstaniu kościuszkowskim* (Warszawa, 1938). リンゲルブルムは戦勃発後も博士論文の続編、「近現代編」「同時代編」にあたる部分を執筆し『第二次大戦中のポーランド＝ユダヤ関係』へと繋げた。Emanuel Ringelblum, *Polish-Jewish Relations during the Second World War* (Jerusalem, 1974).

17 1920–30 年代、政治的な国民意識形成を使命と自認するポーランド人の歴史家達がポーランド史を描く際、ユダヤ人の扱いは非常に小さいものであった。Engel, “Writing History as a National Mission,” pp. 137–138.

18 Kassow, *Who Will Write Our History?* p. 101. このとき難民状態になった人々の中に両親が含まれていると知った青年ヘルシェル・グリンシュパン（Herschel Grynszpan, 1921–?）がパリのドイツ大使館を訪ね、面会した書記官エルンスト・フォン・ラート（Ernst vom Rath, 1909–1938）を狙撃する（11 月 7 日）。二日後にラートの死をジョセフ・ゲッベルス（Joseph Goebbels, 1897–1945）が公表、反ユダヤ・デモを指示して「水晶の夜」が展開された。Gutman, “Emanuel

メンバーと共に 5 週間、難民の支援にあたる。

このときリンゲルブルムは、5000 人分の入居地として必要な経済諸分野を全て備えた「村」を編成した。慈善団体の支援ではなく、自助・独立の活動として、500 人程度の難民達自身が村の運営にあたるようにした。特に若いメンバーを運動に組織することに精力を注ぎ、図書館、学校、イディッシュやヘブライ語の語学コース、コンサートや演劇を組織した。それと同時に、リンゲルブルムは難民が逮捕・追放された経緯を叙述するよう促し、追放に関する詳細な研究を準備するために細かな聞き取り調査を行った [19]。

1939 年 9 月、ドイツ軍がポーランドに侵攻したとき、第 21 回シオニスト会議に出席するためジュネーブにいたリンゲルブルムは、すぐにワルシャワへ戻りジョイントを軸に避難民の支援を行った。主だったユダヤの政治家やエリートが東部や国外へ逃れようとしたのとは対照的であった [20]。並行して 1940 年 1 月から RA の記録の作成・保管が本格的に始まった。聞き取るべき証言は、彼らが支援するゲットーの住民や避難民から得ることができた。ここにおいて、リンゲルブルムらの社会活動と歴史家としての史料収集とが統合されたことに RA の特徴があった。

一例として、集められた文書から、開戦の日の様子を描いた「ワルシャワ市民ヴォイディスワフスキの日記」を引用する。

> 掘り返された街路から、塹壕から、砂をかぶった窓から、動員の告示から、一つの、唯一つの、恐ろしい言葉が現れた―― **戦 争 だ！** 往来は突如として静まり返り、倍の力でスローガンが一斉に叫ばれる。街中を軍の部隊が行進していく。長い。際限がない。灰色。喧騒。軍靴。…戦争が入りこんできた、町に侵入してきた、閉ざされた静かな建物に踏み込んできた、鬱屈していた人々を活気づかせた、彼らを事務所や工場と結びつけていた足枷を砕いた、ワルシャワの住民を構成する緊密で密集した被造物の寄せ集めを解き放ったのだ。それは皆を驚かせた。その到来はあまりにも予期されずに、あまりにも突然であったから人々は皆取り乱して判断力を失い、しかもその上にドイツの榴散弾が襲った。ワルシャワ、1939 年 9 月 1 日 [21]

1940 年 2 月にはウッジにゲットーが設置され（4 月 30 日封鎖）、4 月にはアウシュヴィッツ強制収容所設置命令が出された。そして同年 11 月 15 日、ワルシャワ・ゲットーが封鎖される。リンゲルブルムはジョイントを離れず、ワルシャワ・ゲットーのユダヤ人のための福祉プログラム（給食施設など）や「住居委員会」を組織し、ゲットー内の貧困に対処しようとした [22]。彼はこうした自助組織を、ドイツ当局の影響下にあるユーデンラートと意識的

Ringelblum, the Chronicler of the Warsaw Ghetto," p. 8; H-J. デッシャー（小岸明訳）『水晶の夜：ナチ第三帝国におけるユダヤ人迫害』人文書院、1990 年、67–73 頁；芝健介『ホロコースト：ナチスによるユダヤ人大量殺戮の全貌』中公新書、2008 年、54–57 頁。

19 Kassow, *Who Will Write Our History?* pp. 101–102.

20 Kassow, *Who Will Write Our History?* pp. 91, 103.

21 ARG/I471 (Ring. I/489). Markowska, ed., *Archiwum Ringelbluma: Dzień po dniu Zagłady*, pp. 7–8.

22 Gutman, "Emanuel Ringelblum, the Chronicler of the Warsaw Ghetto," pp. 8–9.

に対置していた[23]。日々の記録は武器なき抵抗の手段であった。

1942 年 7 月 22 日に始まったトレブリンカへの大量輸送を受け、リンゲルブルムとヘルシュ・ヴァッサー（Hersh Wasser, 1912–1980）[24]は、ベール・ボロホフ学校の校長リヒテンシュタイン（Israel Lichtenstein, 1904–1943?：O. S.「技術部門」責任者）にアーカイヴの埋蔵を依頼する。リヒテンシュタインは、19 歳の助手グラーベル（David Graber, 1923–1942）、18 歳のグジヴァチ（Nahum Grzywacz, 1924–1942）と共にノヴォリプキ通り 68 番地の地下に史料を埋め隠した（1942 年 8 月 3 日頃）。グラーベルは、いつドイツ軍が現れるか分からない恐怖を記している。埋蔵作業中に記した最後のメッセージは、RA 第 I 部に収められた。10 代の彼は、世界がこの出来事を記憶するよう望みを託した[25]。

> 世界に対して悲鳴を上げたり叫んで報せたりできなかった事柄を、私達は地中に埋めた … この偉大な宝物が引き上げられ、真実を世界に叫ぶ瞬間を見るまで生き延びられたらどんなにいいかと思う。そうして世界は全てを知るべきであり、こんな経験をせずに済んだ人々は喜ぶべきだ。私達は退役軍人のように感じるだろう。胸に勲章など欲しくはない。私達はミツキェヴィチに出てくるような父祖となっただろう、子供らや孫らに勝利の、人生の、そして不遇の歴史を語るだろう。何もかもが正常であっただろう …
>
> しかし、私たちが生きてそれを見ることはまず確実にないだろう。だからこそ私は最後の願いを記す。この宝が善き手に落ちることを、よりよい時代まで持ちこたえんことを、20 世紀に何が起きたのか世界に報せ警告せんことを …。私達はいま平和のうちには死なない。私達は使命を遂行する。歴史が私達のために証されんことを。[26]

さらに翌日、1942 年 8 月 3 日、グラーベルは走り書きの追伸を記した。

> 隣の通りが包囲された。私達はみんな慌てている。緊張した雰囲気、最悪の事態に備えている。急いでいる。おそらくすぐにも、最後の埋蔵作業をするだろう。同志リヒテンシュタインは神経質になっている。グジヴァチは幾分不安がっている。私は平静だ。潜在意識の中で、全てのトラブルを

23 Markowska, “Od Redaktora,” p. 206; Kassow, “Introduction,” p. xix.

24 ヴァッサーは LPZ に属し、1939 年 12 月に妻と共に難民としてワルシャワに逃れ、そこで難民支援活動や O. S. の資料収集に加わった。1950 年にイスラエルへ移住。

25 Ruta Sakowska, “Przedmowa,” in Sakowska, ed., *Archiwum Ringelbluma: Konspiracyjne Archiwum Getta Warszawy: Listy o Zagładzie*, tom 1 (Warszawa, 1997), p. XXIII. グラーベルは 10 歳から、グジヴァチは 11 歳からベール・ボロホフ学校に通っていた。グラーベルは LPZ のメンバーとなり、グジヴァチは戦前から児童支援に携わり、占領後はスープキッチンで働いていた。二人の経歴について Olga Głowacka, “Byłem jednym z tych, którzy zakopali skarb...” (2 sierpnia 2014) [http://www.jhi.megivps.pl/blog/156] (最終閲覧日：2015 年 1 月 25 日)。

26 ARG/I415 (Ring. I/432). Markowska, ed., *Archiwum Ringelbluma: Dzień po dniu Zagłady*, pp. 181–182. なお Joseph Kermish, ed., *To Live with Honor and Die with Honor: Selected Documents from the Warsaw Ghetto Underground Archives Oyneg Shabbath* (Jerusalem, 1986), p. 66 と Kassow, *Who Will Write Our History?* p. 3 に同史料の引用があるが、原文（イディッシュ）からの翻訳内容が英語文献とポーランド語文献とで異なるため、ここでは Markowska 収録のサラ・アルム（Sara Arm）訳を底本とした。

やりぬけるだろうと私は感じている。よき日を。私達はただ埋蔵を遂行するだけだ。そう、今でさえ、私達はそれを忘れていない。最後の瞬間まで任務にあること。8 月 3 日（月曜）、午後 4 時 (27)

1943 年 2 月、リヒテンシュタインは、残りの資料を 2 つの牛乳缶に保存し埋める。その中には、第 I 部埋蔵後の極限状態においてなおゲットー内で執筆された記録が納められていた。木工場の作業員レイゾル・チャルノブロダ（Lejzor Czarnobroda）は、報告と日記を書き続けた一人であった (28)。

1942 年 8 月 28 日
なぜ私達は泣かないのか？ なぜ服を引き裂かないのか？ いつでも私達をあの同じ恐ろしい運命が待っている、私達の家族が行き当たったのと同じ運命が —— 拷問に苦しめられガスで殺された母達、父達、姉妹、兄弟。泣くことはできない、目から一滴の涙たりとも絞り出すことはできない。泣くことができるのは人間だ。誰かの前で泣くがいい！ 私達は人間でいるのをやめたのだ！
私達は、殺された人々、親しい人々、親友達の、痛み、苦痛、血まみれの影と化している。もし私にできるのなら血管を開き、ペンを自らの血に浸してこの文章を書くだろう、なぜなら私たちの歴史、ポグロムと殺戮の歴史のページには血が滴っているからだ。だがここで終わりだ、ここが最後だ。あるいは何世紀もの視野から見れば歴史にとって重要ではないのかもしれない、ヨーロッパにユダヤ人がこの先いようとも、いなくとも。… (29)

1943 年 3 月、リンゲルブルムと彼の家族はゲットーを逃れ、ワルシャワの非ユダヤ人地区に潜伏した。4 月 19 日には、ワルシャワ・ゲットー蜂起の只中にゲットーへ戻り、資金を届けユダヤ人が「アーリア人地区」へ脱出するのを助けた。この間に彼は一度労働キャンプへ移送されたが、ポーランド人男性とユダヤ人女性の援助により逃亡に成功し、家族の潜伏先に戻った。しかし、1944 年 3 月、シェルターの場所がゲシュタポへの密告により発見される。一緒に隠れていたユダヤ人 30 数名のほか、居合わせたポーランド人助産師 1 名が逮捕された。パヴィアク監獄に連行されたリンゲルブルムは拷問を受けるが、アーカイヴについて語ることなくゲットーの廃墟で殺害された。43 歳であった (30)。

---

27 ARG/I415 (Ring. I/432). Markowska, ed., *Archiwum Ringelbluma: Dzień po dniu Zagłady*, p. 182.

28 大量輸送の開始以降、アレクサンデル・ランダウ（Alexander Landau, ?–1944）の運営する木工場は O. S. のメンバーらにとって一時避難が可能な地下活動の拠点となっていた。Yisrael Gutman, *The Jews of Warsaw, 1939–1943: Ghetto, Underground, Revolt* (Bloomington, 1989), p. 222; Aleksandra Bańkowska and Tadeusz Epsztein, “Wstęp,” in Bańkowska and Epsztein, *Archiwum Ringelbluma: Konspiracyjne Archiwum Getta Warszawy: Ludzie i prace “Oneg Szabat,”* tom 11 (Warszawa, 2013), p. XXV, note 31.

29 チャルノブロダは戦前、ヤヌシュ・コルチャク（Janusz Korczak, 1878/79–1942）が創刊した少年向け新聞『マウィ・プシェグロント』*Mały Przegląd* の寄稿者であった。ARG/II244;2 (Ring. II/207). Markowska, ed., *Archiwum Ringelbluma: Dzień po dniu Zagłady*, p. 183.

30 リンゲルブルムが最後に潜伏した（1943 年 8 月から逮捕まで）シェルターは、菜園家ミエチスワフ・ヴォルスキ（Mieczysław Wolski）が一家の所有するグルイェツカ通り 81 番の温室の下に作ったもので、多い時で 40 人のユダヤ人を匿っていた。Kassow, *Who Will Write Our History?* pp. 361–362; Gutman, “Emanuel Ringelblum: A Historian and His Time,” pp. 115–116.

リンゲルブルムは、現在ではRAの組織者としてまず知られている人物であるが、ポーランドの歴史学研究においては、中世から近世のポーランド・ユダヤ人の歴史を論じる際に避けることの出来ない業績を残したという点でも重要な存在であった。さらに、彼以降のユダヤ史家たちが、ポーランド語の史料（つまりマジョリティの観点から残された史料）や、行政文書（権力を持つ側の視点から残された史料）にのみ基づいて、ユダヤ人の歴史、ユダヤ＝ポーランド関係史を書くことのないよう資料を残す必要があるという、資料編集者・選択者としての意識を強く持っていた。大学や政府機関など公的な後ろ盾が一切ない中で行われたRAの活動の緻密さは、歴史が消失することへの危機感がそれだけ強かったことを示唆している。史料編纂をする者がマジョリティでなく権力の後ろ盾を持たないがゆえに、歴史叙述における「公正さ」の獲得を重要視する姿勢が生まれ、RAの編集方針に反映されたといえよう。

2. RAの発掘・研究状況

現在、RAは一部史料を除きワルシャワのユダヤ歴史研究所（Jewish Historical Institute、以下ŻIHと略す）[31]に所蔵されている。史料の活字化・翻訳・発行は1997年以降ŻIHが主体となり『リンゲルブルム・アーカイヴ・シリーズ』として順次行われている[32]。

ノヴォリプキ通りに埋蔵された史料（RA第I部）は、ゲットーの廃墟から1946年9–10月に探索の結果掘り出され、1950年12月には建築工事の途中で第II部の埋蔵分が発見された[33]。最後に埋められたとされる第III部は、現中国大使館の敷地内に残っているという説が根強いものの未だ発見されていない[34]。

ŻIHはワルシャワ市街でも戦前からユダヤ住民が多く暮らし、ドイツ占領下でゲットーが設置されたムラヌフ地区に位置する。ŻIHの建物は、大シナゴーグ（Wielka Synagoga、1876–78年に建築）に併設された図書館（Główna Biblioteka Judaistyczna、1928–36年に建設）であり[35]、講堂や展示室は集会にも用いられた。ユダヤ学研究所（Instytut Nauk Judaistycznych）[36]はこの建物を拠点とし、当時のヨーロッパとしては先取的な教育・

31 ŻIHの沿革について Jerzy Tomaszewski, “Żydowski Instytut Historyczny w Polskiej Historiografii,” *Żydowski Instytut Historyczny 50 Lat Działalności: Materiały z konferencji jubileuszowej* (Warszawa, 1996), pp.15–21.

32 Tych, Bergman and Hensel, *Guide to the Jewish Historical Institute*, pp. 13–15.

33 1946年6月に締結された合意に基づき、YIVOはRA発掘に際し、資料が発見された場合には総費用の25%を負担することとなった。発見された史料はCŻKH（後述）が所有し、YIVOは写しを入手するために50万ズロチを支払ったほか、修復費用も負担したとされる。Jockusch, *Collect and Record!* p. 252, note 112.

34 Epsztein, “Structure,” p. 9.

35 Jerzy S. Majewski, *Warszawa Nieodbudowana: Żydowski Muranów i Okolice* (Warszawa, 2012), pp. 271–276.

36 ユダヤ学研究所は1920年代後半に設立され、研究教育の拠点として神学と世俗の学問の両方を扱い、ラビや説教師、宗教学の教師を養成した。歴史のほか社会科学の教育も行い、民間向けの人材育成にあたった。リンゲルブルムのユダヤ史の師であるシパーはユダヤ経済史の講義を担当していた。

研究の場を提供した。ドイツ軍占領下ではユダヤ社会自助組織（Żydowska Samopomoc Społeczna）が 1940 年 11 月 25 日以降、文学・演劇活動等を行った。リンゲルブルムら O. S. の歴史研究の会合（に見せかけた史料収集・編纂会議）は、それらの文化イベントに紛れて行われた。大シナゴーグの建物は、1943 年 5 月 16 日にゲットー蜂起鎮圧の締めくくりとして爆破され、隣接の図書館も被害を受けた。

1946 年、ワルシャワ市当局は半壊した図書館の建物を在ポーランド・ユダヤ人中央委員会（Centralny Komitet Żydów w Polsce、CKŻP）[37] に公式に委譲する。CKŻP は書籍・史料・美術作品等の修復、再収集を目的に、中央ユダヤ歴史委員会（Centralna Żydowska Komisja Historyczna、CŻKH）を組織し、同委員会がナチスによる対ユダヤ政策の実態調査をあわせて行うこととなった。1946–47 年の移行期を経て、同委員会の収集史料が ŻIH に引き継がれる形で現在に至っている [38]。

RA の収集・編纂に携わった歴史家は、リンゲルブルムを含め殆どが終戦前に没した。例外的な生存者として、ジャーナリストで文筆家のラヘル・アウエルバフ（Rachel Auerbach, 1903–76）、O. S. の秘書であったヴァッサーとその妻（Bluma Wasser, 1912–90）がいた。1946 年の発掘調査の中心となったのはこの 3 名であった [39]。

第一の発掘で発見された史料は損傷が激しく、箱の中に水が入り緑色のカビに覆われていた。そのため ŻIH だけでなく、国立図書館等ポーランド国内の文書舘・図書館から史料修復の専門家が協力し開封作業が行われた。史料が所在不明のまま失われることを恐れていたアウエルバフらは、どうにか読める状態で発掘がなされたことに安堵したが、史料の活用は困難を極めた。湿気や埃やさびによる損傷、経年劣化に加え、資料が占領下の時間も資源も

---

37 ポーランド国民解放委員会（PKWN）のマニフェストは、ユダヤ人に生活の再建と法律上および事実上の同権を保障していた。1944 年 11 月 4 日、ルブリンにおいて臨時に TCKŻP が設立され、1945 年 2 月に CKŻP へ移行した。August Grabski, *Działalność komunistów wśród Żydów w Polsce (1944–1949)* (Warszawa, 2004), pp. 57–59.

38 ŻIH はポーランド・ユダヤ人殺害の実態調査のほか、8 世紀に及ぶポーランド・ユダヤ人の歴史的・文化的遺産の保全を目的に設立された。設立時には第二次大戦を生き延びたユダヤ人がポーランド国内に 20 ～ 25 万人いたものの、戦前（350 万人）の 6% 程度に過ぎず、元のポーランド・ユダヤ社会の回復は望めなかった。さらに幾つかの移民の波を経て、残存していたユダヤ人の 95% がポーランドから出国したとされ、ŻIH は設立 50 年を経て「ユダヤ人がほとんどいない国のユダヤ研究所となってしまった」（フェリクス・ティフ）。その存在意義は、当初の設立目的よりも、資料保全・調査やポーランド社会にユダヤ史を紹介する市民教育活動へと重心を移しつつある。Feliks Tych, “Słowo wstępne,” *Żydowski Instytut Historyczny 50 Lat Działalności: Materiały z konferencji jubileuszowej* (Warszawa, 1996), p. 6.

39 1946 年 9 月 18 日に史料が発掘された際の状況について Kassow, *Who Will Write Our History?* pp. 1–3. 社会活動家として知られたアウエルバフは、1903 年ガリツィアのラノフツェに生まれ 1976 年テルアビブで没した。1933 年までルヴフ（レンベルク）とワルシャワにおいてポーランド語・イディッシュ語の新聞や雑誌に寄稿。1939 年 9 月、リンゲルブルムに依頼されゲットー内で飢えた子供向けのスープキッチンの組織に当たった。二年後、O. S. の地下活動に加わる。1943 年にアーリア地区へ脱出、地下向けにゲットーの内実を伝える文章を執筆した。1945 年 11 月にはトレブリンカ収容所の実態を調査するなど、RA の発掘だけでなく、ナチスによる犯罪の証拠の保持と記録にあたった。Jerzy Lewiński, “The Death of Adam Czerniaków and Janusz Korczak’s Last Journey,” in *Polin*, vol. 7 (Oxford, 1992), p. 251, note 8.

ない中で急遽まとめられたことからくる順序の混乱が妨げとなった。また、発掘された史料は、戦後の共産主義体制下のポーランドにおいて党のイデオロギーを反映する形での省略と「補正」がなされ、内容が全て明らかにされたわけではなかった[40]。RA から抜粋しまとめた選集がポーランド内外で複数出ているが、そうして公刊された史料の断片を合わせても全体量のごく一部に留まる[41]。日本においては 1959 年に「『アンネの日記』に匹敵する感動の渦を巻き起こした」史料として RA が紹介され[42]、ほぼ 20 年おきに新訳が出ているが、内容は英語版に準じており、RA の全体像を把握する研究は緒に就いたばかりといえる。

史料の整理状況をみると、1980 年代のルタ・サコフスカ（Ruta Sakowska）の研究により、RA の第二の部分のうち約半分が概観できるようになった[43]。90 年代には体制転換により資料公開の制約が取り払われ、2007 年に 15 年間をかけた史料の保護作業（デジタル化と再度のミクロフィルム化）が完了した。これにより史料の安全が保たれるだけでなく、従来読むことの出来なかった断片の拡大処理や資料同士の比較対照、複数の作業者による同時閲覧が可能になった。こうした調査と並行して、エプシュタインらはアーカイヴのすべての文書を網羅する目録と索引の作成を進めてきた。包括的な目録の作成は、米ホロコースト記念博物館（在ワシントン D. C.）と共同で 2003 年に開始された。本稿で取り上げているポーランド語版目録が『リンゲルブルム・アーカイヴ・シリーズ』の一冊として刊行されるより早く、2009 年にシャピーロ訳の英語版の索引が別途出版されたが[44]、記述言語が異なるだけで構成と内容はほぼ同一である[45]。本書『リンゲルブルム・アーカイヴ調査目録』（2011 年）は、たんに資料のナンバリングをし直したのではなく、RA を再編成する ŻIH の取り組みと連携した成果といえる。

3. エプシュタインの編集による調査目録の概要と特色

RA は発掘時期により大きく二分され、Ring. I、Ring. II と略称される。最初のカタログの作成は、1946 年 9 月に 10 個の缶に入った史料（Ring. I）が発掘された際すぐに始まり、

40 1952 年に ŻIH がリンゲルブルムの『覚え書』（イディッシュ版）を出版した際、特にポーランド人の反ユダヤ主義に触れた部分に関し意図的に省略がなされた事情について、大島かおり「訳者のあとがき」リンゲルブルム『ワルシャワ・ゲットー』372–378 頁。リンゲルブルム晩年の主著『第二次大戦中のポーランド＝ユダヤ関係』全編の出版も妨害された。Bauer, “Foreword,” in Emanuel Ringelblum, *Polish-Jewish Relations during the Second World War* (Jerusalem, 1974), p. xliii. ポーランド語で出版された『日記』のうち最も内容が充実しているのは Emanuel Ringelblum, *Kronika getta warszawskiego: wrzesień 1939 - styczeń 1943*, Artur Eisenbach et al., eds., Adam Rutkowski trans. (Warszawa, 1983).

41 Ruta Sakowska, “Przedmowa,” in Sakowska, ed., *Archiwum Ringelbluma*, p. VII. 選集として代表的なものに、Kermish, ed., *To Live with Honor and Die with Honor* 及び Ruta Sakowska, ed., *Archiwum Ringelbluma: Getto Warszawskie, lipiec 1942-styczeń 1943* (Warszawa, 1980)。

42 E. リンゲルブルーム（山田晃訳）『ワルソー・ゲットー：壁の中の恐怖の記録』1959 年、光文社。

43 Sakowska, ed., *Archiwum Ringelbluma: Getto Warszawskie* (Warszawa, 1980).

44 Shapiro and Epsztein, eds., *The Warsaw Ghetto Oyneg Shabes-Ringelblum Archive: Catalog and Guide*.

45 Tadeusz Epsztein, “Catalogue of the Ringelblum Archive: Summary,” in Epsztein, *Inwentarz Archiwum Ringelbluma*, trans. Eleonora Bergman, p. 939.

文書リストが順次作成された（所謂 1946 年版目録、“Katalog”z 1946r.）。一時中断を挟んで 1946 年 11 月までその作業が続いている間に、第 10 の缶に文書の概要が入っていたことが分かり、この缶が最後の部分であることが確認された。1946 年版目録は、全ての資料を整理したわけではないものの、最初の目録として Ring. I に関する基礎的なデータを提供し、埋蔵時の配列を復元したり所在不明の史料を集めるのに役立ったとされる [46]。

初期に作成されたもう一つの文書リストとして、ヘルシュ・ヴァッサーの目録があった。ヴァッサーは Ring. I の発掘だけでなく整理作業や最初のカタログ作成にも参加し、見つかった文書の検証と記録を真っ先に指揮した人物である。但し、ヴァッサーの説明は常に正確に手稿の来歴を再現したわけではなかったため、このとき彼がコレクションの全体を把握していたかどうかエプシュタインは懐疑的である。例えば、ヴァッサーは同じ文書を異なる著者のものと判断したり、O. S. の主要な協働者の筆跡を見分けられなかった。それにも関らず、生存する当時者でもあるヴァッサーの説明はかけがえのない情報源であった。文書の原作者や出処、あるいは日付に関するデータの多くは、史料を適切に見分けるために少なからぬ重要性を持っていた [47]。

RA 全体を網羅する目録作成は、1955 年初旬に ŻIH 文書館のスタッフ、アルノ・オットー・ザーラー（Arno Otto Zahler）の指揮の下で行われた。1955 年の目録は RA の大部分の史料を含んでいたが、そこに含まれない断片集も残っていた。また、写真のコレクションは全て Ring. I から ŻIH のコレクションに移され分散した。また画家ゲラ・セクシュタイン（Gela Seksztajn, 1907–1943）の作品は独立のコレクションとして ŻIH の博物館に収められた。印刷物の一部も別建てにされた [48]。

1955 年に準備された目録は、文書の全般的リストであり、個々の文書の中身を詳細に確認することなしに編集された。文書についての簡明な説明は、実際の内容についてあまり記していなかった。多くの不備にもかかわらず、1955 年の目録が RA の研究者に半世紀近く役立てられてきたことは否定できない [49]。

なお 1955 年以来、RA の配列には様々な細かい変更があった。誤って RA に入れられていた文書もあり、エプシュタインらは新しい目録を準備する際にこれらの史料を取り除き、ŻIH アーカイヴの他のコレクションに移管した。また、RA に改めて記録された文書も十数点あり、多くは 1970 年以前に所在不明となっていた文書であった [50]。

エプシュタインによるナンバリングが開始された時点で、Ring. I は旧番号で 1 番から 1219 番の史料で構成され、Ring. II は旧番号で 1 番から 493 番の史料で構成されていた。

---

46 Epsztein, “Structure,” pp. 9–10.

47 Epsztein, “Structure,” p. 10.

48 Epsztein, “Structure,” p. 11.『リンゲルブルム・アーカイヴ・シリーズ』はセクシュタイン作品のために一冊を充てている。Magdalena Tarnowska, ed., *Archiwum Ringelbluma: Konspiracyjne Archiwum Getta Warszawy: Życie i twórczość Geli Seksztajn*, tom 4 (Warszawa, 2011).

49 Epsztein, “Structure,” pp. 11–12.

50 1955 年には幾つかの同一のコピーとして RA に保存されていた 43 点の文書がエルサレムのヤドヴァシェムに移されている。1970 年になっても ŻIH はまだコレクションの保存に適した状態ではなく、研究利用できる状況ではなかった。Epsztein, “Structure,” p. 12.

上述のように、RA の構成単位の中には Ring. I と II の両方から移動・統合された部分もあり、特定の文書がどのような経緯でどこに移動されたのか、必ずしも明らかではなかった [51]。本書エプシュタインによる調査目録の最大の特徴は、そうした混乱を整理し直し、重複・欠落を可能な限り解決した点にある。

それに加えて本書には、新番号から旧番号へ、また、旧番号から新番号への互換表が付されている [52]。先述のカッソウによる研究を始め、RA やリンゲルブルムに関する古典的・先駆的研究は旧番号を用いており、『リンゲルブルム・アーカイヴ・シリーズ』は新旧両方の番号を付している。今後は新番号で史料を引用する研究が増えていくことも考えられ、先行研究による引用部分と照合する必要が生じる [53]。長期的にみるなら本書の互換表は RA 研究を行う上で欠かすことができないガイドとなる。

おわりに

最後に、RA の利用状況と今後の課題について言及しておきたい。ŻIH は RA をテーマごとに再編集する事業を行っており『リンゲルブルム・アーカイヴ・シリーズ』として順次公刊している（1980 年、1997 年、2000 年、2011–14 年）。2014 年に第 15 巻が公刊され、2017 年をめどに最終巻が準備されている。『リンゲルブルム・アーカイヴ・シリーズ』各巻のテーマは、「ホロコーストについての手紙」、「子供達：ワルシャワ・ゲットーにおける地下教育」、「東部境界からの証言」、「画家セクシュタインの生涯と作品」、「ワルシャワ・ゲットーの日常生活」、「地方行政：報告と文書」、「O. S. メンバー遺稿集」、「第三帝国に併合された地域①②」、「ウッジのユダヤ人の運命（1939–1942 年）」、「O. S. の人々と活動」、「ユーデンラート」、「死、移送の最終段階」、「ヘルシュ・ヴァッサー・コレクション」、「1939 年 9 月」と多岐にわたる。

1942 年初頭の段階では、リンゲルブルムや O. S. の歴史家達は開戦以来のワルシャワにおけるユダヤ人の生活の概観を自分たちで描くことを企画していた。しかし 1943 年 2 月に RA 第 II 部を埋蔵し、収集した史料が参照できなくなる。埋蔵を検討した段階から、リンゲルブルムらはレトリックを避けて記録と収集に徹し、文書に記された内容を自分達で解釈し叙述するのではなく、それをまだ見ぬ未来の歴史家達に委ねる選択をしていたと考えられる [54]。解釈者としての意識を最小限にとどめたことが一因となり、RA は収集者によって体系的な構造を与えられなかった。そのための時間的余裕もなかったと考えられる。現行の『リンゲルブルム・アーカイヴ・シリーズ』が編者の設定したテーマに基づいて史料を編纂する形と

51 Epsztein, “Structure,” p. 1.

52 Epsztein, *Inwentarz Archiwum Ringelbluma*, pp. 811–848.

53 新番号と旧番号を表記上どのように区別するかは研究者によって分かれており、新旧共に Ring. I ないし II に番号を続ける形で用いられている。『リンゲルブルム・アーカイヴ・シリーズ』内でも出版時期により表記が異なる。第 1 巻は旧番号に従って Ring. を用いているが、第 15 巻は新番号を ARG、旧番号を Ring. として、両方を記載している。本稿では新番号を ARG、旧番号を Ring. とした。

54 Engel, “Writing History as a National Mission,” pp. 117–118.

なっており、巻の刊行順番と時系列とが切り離されているのはそのためである[55]。

没後 70 年にあたる 2014 年の「リンゲルブルム・イヤー」を前に史料整理が完了し、データベース化されたデジタル資料の閲覧が可能になった。資料集シリーズの刊行にはなお数年を要するが、今後は、RA をどのようにポーランド＝ユダヤ関係史において解釈・評価するか、という本来の課題に漸く関心を向けることができるようになった。従来は RA からワルシャワ・ゲットーの人びとの証言記録が引用されることが多かった。本稿において引用した文章を含め、最後の証言であるそれらの手記や手紙、日記には、他にはない説得力がある。それに対し、RA にはドイツ占領下のユダヤ人の生活領域（ワルシャワ以外の占領地区や強制収容所、絶滅収容所）全般に及ぶ調査記録があり、聞き取りの手順や研究方法などを定めた文書が重要な構成要素となっていることはあまり知られていない。また、ゲットー内で発行されていた地下新聞の集積は他に類を見ない規模であり、RA が保管した各グループの刊行物がどの期間に、何号まで刊行されたかを把握することができる。そこから逆算してゲットー内における政治活動の概要を描く試みもなされている[56]。

O. S. の迅速な史料収集を可能にした戦前からの歴史家のネットワーク形成過程など、リンゲルブルムの歴史観を知る上で考慮すべき論点は少なくない。RA は製本の外れた百科事典ともいうべき総体であり、どのようなアプローチにも開かれているがゆえに、史料を利用する研究者それぞれは O. S. によって叙述を委ねられた存在であると自覚することになる。その際に、本書『リンゲルブルム・アーカイヴ調査目録』が果たす役割は重要性を増していくだろう。

［付記］本稿の執筆にあたり、赤尾光春先生（大阪大学）、高尾千津子先生（東京医科歯科大学）、石田憲先生（千葉大学）、伊東孝之先生よりご助言を賜りました。また本稿は成蹊大学政治研究会（成蹊大学法学部、2013 年 11 月）、基盤研究（B）「『ユダヤ自治』再考：アシュケナージ文化圏の自律的特性に関する学際的研究」第一回公開ワークショップ（大阪大学中之島センター、2014 年 5 月）、世界政治研究会（東京大学本郷キャンパス、2014 年 6 月）および日本国際政治学会・ロシア東欧分科会（福岡国際会議場、2015 年 11 月）における報告に基づいています。貴重なコメントを頂いた細見和之先生（大阪府立大学）、出席者各位に感謝いたします。なお本稿の不備は全て筆者の責任です。

55 Sakowska, “Przedmowa,” pp. VI–VII.

56 Ewa Koźmińska-Frejlak, “Żydowska prasa konspiracyjna. Rekonesans badawczy,” in Joanna Nalewajko-Kulikov, ed., *Studia z Dziejów Trójjęzycznej Prasy Żydowskiej na Ziemiach Polskich (XIX–XX w.)* (Warszawa, 2012), pp. 181–185.